

伝えたい願い

—画家・彫刻家

ちようこくか
やすだりゆうもん
—
保田龍門

夏休みも半分が過ぎようとしていた。ぼくは、いつもより少し早く目覚めたので、新聞をポストからとってきた。なんだか朝からよいことをした気持ちで、横になってテレビを見ていた。

「正男、朝からごろごろするのはやめなさい。宿題はできているの。本当に毎日朝からテレビばかり見て、どうしようもない子ね。」

と、朝食を準備していた母が、ぼくをしかった。

「朝から新聞をとってきたのに、そんな言い方はないよ。ぼくだって……。」

続きを言おうとしたが、母はぼくの話をさえぎった。

「ちよつと新聞をとってきたくらいで、何をえらそうに言っているの。正男もせっかくの夏休みなのだから、自分から勉強したり、家の手伝いをしたりしなさい。」





「母と子」保田龍門作

すると、だまって新聞を^よ読んでいた父が、
「^{まさお}正男、今日はお父さんといっしょに勉強に行くぞ。」
と、言った。

朝食を終えて、ぼくは、父と美術館^{びじゅつかん}に出かけた。

(どうして美術館に行くのだろう。)

ぼくは、父の考えていることがわからなかった。

美術館に入った父とぼくは、歩きながら作品を見ていた。

突然^{とつぜん}、父はある作品の前で立ち止まった。ぼくも立ち止まり、
父が見ている作品に目を向けた。ぼくの目に^と飛びこんできた
のは、みかん畑を背景^{はいけい}に、まっすぐ正面^{しょうめん}を向いたお母さんと、
お母さんの手をにぎり、体を^よ寄せている子どもの絵だった。

(なんだろう、この絵は……。)

なぜだかわからないけれど、ぼくはこの絵から目がはなせなかった。ぼくの様子を見て、父はおだやかに話し始めた。

「この絵を描いたのは、保田龍門さんという和歌山県出身の人だよ。紀ノ川沿いの龍門村、今の紀の川市の農家で生まれたんだ。ご両親は、わずかな田畑を苦勞して耕し、みかん山をひらいて、やっと龍門さんを中学校へ通わせたんだ。当時は、勉強したくても中学校に行かせてもらえない時代だったので、龍門さんは、両親に感謝し、勉強をよくしたんだ。それに、絵を描くことに大變興味をもち、將來は画家になりたいと思っていたんだ。けれど、家の生活を考えて、上の学校に進むとは言い出せなかったんだよ。そんな時、医者になるならお金を出してくれるという話があつて、龍門さんは学校で勉強できるならと四国に行ったんだ。でも、ある時、絵の展覧会で『落葉』という作品を見て、『ああ、なんとこの世界だろう。こんな絵を描きたい。』と思つたんだよ。それで、画家になりたいという思いをご両親に話したんだ。するとご両親は、その願いをみとめてくれたんだよ。」

ぼくは、思わず、

「えっ、どうして龍門さんは、そんなことを言い出したの。だって、おうちがとても貧しかったんで

しよう。そんな中で、龍門りゅうもんさんのお父さんとお母さんは、どうして龍門さんに絵なんか勉強させたの。早くお医者さんになって、お金をかせぐ方がよかったんじゃないの。」

と聞き返した。父は少し間をおいて、

「本当にそう思うかい。正男まさおは、今、サッカー選手せんしゅになりたいという夢ゆめをあきらめきれるかい。」
と、言った。

「でも……。」

ぼくは、考えこんでしまった。

ぼくの顔を見ながら、父は、ふたたび話し始めた。

「美術学校の卒業そつぎょうが近づいた冬、龍門さんは、卒業制作せいさくのために龍門村に帰ったんだ。家に絵を描く場所がなかったので、村の青年会館を借りて、年をとったお母さんをモデルに描き始めたんだよ。

二人とも、会館のすき間から入ってくる身を切る



ような北風にふるえながら、卒業制作に取り組んだんだよ。お母さんは、熱心に絵筆を動かして作品をつくっている龍門さんの姿を見て、やけどをするのもかまわずに火箸を足につけながら、眠気を覚まして協力したんだよ。」

そして、父は、絵の方にふり返り、

「これが、その時に描かれた『母と子』という絵だよ。この絵は、この年の文部省美術展覧会で特選になったんだ。その時、龍門さんはどんな気持ちだったのだろうね。」と、言った。

ぼくは、龍門さんががんばれた理由が、何となくわかった気がした。

「お父さん、早く家に帰ろう。」

父はにこりとわらった。



※注 1 『落葉』・・・菱田春草が明治四十二年（一九〇九年）に描いた作品。

※注 2 火箸・・・火鉢や火箱の炭をつかんだり動かしたりするための金属製のはし。

（参考文献）

・『自画裸像―或る美術家の手記・保田龍門遺稿』三木多聞（形文社）

（写真提供）

・和歌山刑務所